

ミッション・スクールの 女子教育に関する一考察

渡 辺 良 智

〔キーワード〕 ミッション・スクール, キリスト教, 女子教育, 階層文化,
ハイカラ, 文化資本

1. はじめに

日本の私立学校の中にミッション・スクールと呼ばれるキリスト教系の学校がある。小学校から大学までの学校数ではプロテスタント系が333校、カトリック系が315校であり、さらに、これら以外の学校もある。高校について見れば、プロテスタント系94校、カトリック系115校、その他8校、計217校である。日本に高校は5,418校あり、そのうち国立・公立が4,097校、私立が1,321校であるので、私立は高校全体の24.4%、ミッション・スクールは私立の16.4%¹⁾、高校全体の4%を占めている。

日本のキリスト教信者は、総人口の約1%だといわれるので、ミッション・スクールはキリスト教信者だけのための学校でなく、キリスト教信者以外の者も多数入学している。ミッション・スクールが、このように広範に日本社会に受け入れられているのは何故なのだろうか。それどころか、ミッション・スクール出身者の皇室への嫁入りが続いたので、一部のミッション・スクールについてはやんごとない人びとの通う高貴な学校だというイメージすら持たれているのは何故なのか。本稿ではこれらの理由について考察してみたい。

ミッション・スクールが広く日本社会へ受け入れられた理由の1つとして、それが日本の女子教育に対して貢献したことが考えられる。何よりも、ミッション・スクールが近代的女子教育を開始したことが高く評価されている。

女子教育は、元と、宣教師諸君のみの尽力したる者にて最初は宣教師諸君の外に女子を教育したるものは日本国中にあらざりしことなり、即ち政府に於て女子師範を設立せざる以前、民間に於て一の私立学校も起らざりし前に既に宣教師諸君は文明風に女を教育したり²⁾。

女子に学問はいらないといわれていた時代にあつて、女子のために本格的な学校教育を提供したことは、婦人の地位に関する歴史の上で特筆に値することだといえよう³⁾。

明治時代のキリスト教主義女学校が、日本の近代化のなかで、女子教育史上先駆的な役割を担ったことは周知と言っていいたい⁴⁾。

それだけでなく、「特にキリスト教系の女子高等教育機関が、特に明治時代において先駆的役割を果たしたことは忘られるべきではない⁵⁾。」

そして、現在でも、その流れをくんで、女子高校、女子短期大学、女子大学の中にミッション・スクールが多い。ミッション・スクールと聞くと、なんとなく女子校を連想するのもそういった事情があるからだろう。本稿では、とくにミッション・スクールと女子教育との関連について検討してみたい。

それに先立って、そもそもミッション・スクールとはどのような学校なのか確認しておこう。ここで、『キリスト教大事典』の解説を参照してみよう。

ミッション・スクールは、伝道会社 (mission) が開拓伝道地諸国に対する伝道事業の一手段として設立した学校であるが、その後、開拓伝道地の教会によって設立された学校、またはその国のキリスト教信者によって設立された学校をも含めることもある。このような学校設立母体の多様化と、ミッション・スクール自体の性格の変化に伴って、近年はミッション・スクールに代ってキリスト教主義学校という名称が一般に用いられている⁶⁾。

このように、ミッション・スクールとは、「欧米諸教会の伝道局 (ミッショ

ン)によって設立された伝道・布教を目的とした学校」であり、青山学院、明治学院、立教学院、関西学院、東北学院等の淵源の学校は、キリスト教の伝道・布教を目的としていた。実際、1892(明治25)年に「私たちは第一に宣教師であり、もし学校を宣教の場として活用できないならば、ここを去らざるを得ません⁷⁾」と語った女性宣教師もいた。また、当時の日本人のミッション・スクールの受け止め方も同様であった。「一般人民からは、耶蘇臭いものとのみ思われて、『アノ学校は女の尻をこしらえるところだ』といわれていたものです⁸⁾。」また、二葉亭四迷の『其面影』(1906年)にも「^{ミッションスクール}伝道学校へ預けられた」「^{ミッションスクール}伝道学校にいたのだから」という表現がみられる。

そして、明治初期のミッション・スクールは、つぎのように分類される。日本人伝道者を養成した神学校タイプ、欧米先進文化を身につけた人物養成タイプ、当時の日本では全く顧みられなかった女子教育タイプ、混血児対策から出発した保育学校タイプ⁹⁾。

さらに、一口にミッション・スクールといっても、ミッションが設立し経営するミッション・スクールからミッションの支援している学校、ミッションとは無関係のキリスト教系の学校までである。しかも、今日のミッション・スクールの教育目標は、キリスト教の伝道というよりもキリスト教(精神)に基づく人間教育となっている。伝道よりも人間形成・人格教育を目指している。しかしながら、キリスト教精神(主義)に基づく教育は、これらの学校すべてに共通である。そこで、近年、「ミッション・スクール」ということばは、「(プロテスタント系かカトリック系かは問わず)キリスト教(精神)に基づく教育を行っている学校」という意味で、一般的に用いられている。以下、本稿でもこの意味で用いることにしたい¹⁰⁾。

2. ミッション・スクールと女子教育(Ⅰ)

まず、日本における近代的女子教育の歴史から取り上げてみよう。

1873(明治6)年、キリスト教の禁令が失効するとともに、海外から宣教師が多数来日して、キリスト教の伝道活動も活発化した。そこには、19世紀

後半という時代背景があった。この時期は、「世界史的に見て欧米発のキリスト教ミッションの活動が地域的にも規模のうえでも急速な拡大を見た時期であり、ミッション・スクールもそれにもなって世界的に急増する¹¹⁾。」アメリカ、イギリスから多くの宣教師が海外に派遣され、宣教活動を繰り広げた。宣教師たちは、現地の人々との接点・宣教の根拠地として、学校を設立したのであった。

日本では学制発布に先立つ 1870 年にジュリア・カロゾルスが築地居留地で始めた A 6 番女学校と同じ年に横浜でキダー女史が始めたキダー女塾が、最初のキリスト教による女学校であり、この年から日本における近代女子教育の歴史が始まった¹²⁾。当時、男子のためのミッション・スクールはまだなかった。ここで、明治年間に創設されたプロテスタント系ミッション・スクールの数を、男女校別・時期別に示してみよう (表 1)。

表 1 プロテスタント系ミッション・スクールの数¹³⁾

時 期	男子校			女子校		
	新設	閉校・転学	差引	新設	閉校・転学・合併	差引
～1870(明治 3)	0	0	0	2	0	2
～1879(明治 12)	5	1	4	15	3	12
～1889(明治 22)	13	1	12	35	2	33
～1899(明治 32)	4	6	-2	6	12	-6
～1912(明治 45)	2	1	1	2	1	1
合 計	24	9	15	60	18	42

この表から、明治年間に男子校は 24 校創設され、うち 9 校が閉校またはミッション・スクールでなくなり、最終的に 15 校が存在したことがわかる。これに対して、女子校は 60 校創設され、18 校がなくなり、42 校が存在したことがわかる。そして、1870 年代初から 80 年代末にかけて、現在まで続いている学校の礎石となっている女学校が、アメリカのプロテスタント諸派ミッションを中心に続々と創設されていることが注目される。具体的に現在の校名で示せば、フェリス女学院、女子学院、青山学院、神戸女学院、立教女学院、活水

学院、大阪女学院、広島女学院、宮城女学院、東洋英和女学院、北陸学院、北星学園、福岡女学院、静岡英和女学院、山梨英和学院等々である。

それでは、ミッション・スクールに、女子校に比べて男子校が少なかったのは何故なのか。その理由はいくつか考えられる¹⁴⁾。第一に、明治6年にキリスト教は禁制でなくなったものの、一般の人々のキリスト教に対する態度は懐疑的なものだった。「社会全体に反キリスト教感情というものが非常に強かった¹⁵⁾」という証言もある。学問の主たる目的が、「学事奨励に関する被仰出書」(明治5年)のいう「学問ハ身ヲ立ルノ財本」＝立身出世であった男子にとって、ミッション・スクールに学ぶことは不利だと考えられたことは容易に推察できよう。日本社会では一般に官尊民卑の傾向が強く、男子の教育は帝国大学を頂点とする官公立学校が主流だったので、これらで学ぶ方が私立学校に学ぶよりも有利であり、私学でキリスト教という二重に不利なミッション・スクールで学ぼうと希望する者は男子には少なかったであろう。

だが、この時期に創設されたミッション・スクールに女学校が多かった特別な理由が、さらにいくつかあったと考えられる。

最初に、アメリカから多数の女性宣教師が日本に派遣されたことである。女性宣教師は宣教師全体の6割を占めたという。彼女たちは伝道的手段として競って学校を創設した。このような活動の背後にアメリカ社会の動きがあったと考えられる。19世紀後半、アメリカでは大都市居住の有閑既婚中流女性のリーダーシップによって「婦人伝道局」が大々的に組織され、女性宣教師を海外伝道に積極的に派遣した。そして、アメリカでは各種の人道的社会改良運動が展開され、女性の社会的地位や教育程度を高め、男女同権を求める運動が効果を収めつつあった時期でもあった。当時は男の領域と女の領域が明確に区分されており、女性宣教師の活動は女性の領域を広げることに繋がった¹⁶⁾。

また、ミッション女学校は、宣教活動の一環であったばかりでなく、アメリカにおける女学校発展運動の一環ではなかったのかという指摘もある。女学校発展運動は東部から中西部に及び、そして海外のアジア、中近東、アフリカへまで延長された。日本のミッション女学校はアメリカの女性セミナリーをモデ

ルにしていた¹⁷⁾。そして、寄宿制の「女性セminary教育の宗教的効用を確信すればこそ、女性宣教師は女子教育事業に多大なエネルギーを注いだ¹⁸⁾。」

さらに、19世紀後半になると女性に対する伝道活動の必要性が強調されるようになった。キリスト教的な社会を実現するためにはその基盤となる「キリスト教的な家庭」が不可欠であると考えられた¹⁹⁾。そのために、女性の教育が重要視されたのである。こういった考え方は、最も初期に来日した女性宣教師にも当然持たれていた。ジュリア・カロプルスはその書簡にこう書いていた。

「将来母親となる女性がキリスト教教育を受ければ、文明とキリスト教の速やかな進展を大いに期待できるでしょう²⁰⁾。」

フェリス女学院の創設者ミス・キダーも、こう述べていた。

「女性の人格を高め、清め、ひいては、家庭を清めるには、学校教育しかありません。そして、家庭が清められなければ、この国の人びとに偉大な急変を望むべくもないのです²¹⁾。」

それに加えて、来日した女性宣教師たちは、当時の日本女性の置かれていた社会的地位の低さ、無教育状態に直面して、教育を通じてこれらを改善しなければならないことを痛感したと思われる²²⁾。ミス・キダーは、アメリカのミッション本部に対して、「男尊女卑の東洋諸国、殊に日本に於ては、女子教育の必要なる所以を力説し、教育と共に女子に、精神的基督教感化を及ぼすことは、直接伝道以上の効果を将来に収め得ることを」説明し訴え続けたという²³⁾。また、女子小学校を始めたスクーンメーカーの回想でも、「何処へ行っても『なんで女子のためにやるのですか。女子に学問など出来はしません！男子を採用して英語を教えなさい。直きに大きな学校が出来ますよ』と云われるばかりでした。しかし、私共は『否！』と云って我慢して居たのでした²⁴⁾。」

その上、インド等の国では異教徒の女性の伝道活動には女性宣教師が不可欠だと認識されていた。しかも、ミッション活動のなかで教育を担当したのは主に女性であった。なぜならば、女性宣教師は通常按手礼を受けることができず、正規の宗教活動はできなかったもので、男性宣教師を補佐するのが任務であった。女性宣教師はミショナリーと呼ばれていたが、正式には準宣教師で

あった²⁵⁾。

こうした事情が相俟ってプロテスタント諸派ミッションは女学校を競って創設したのであった。その結果、キダー、カロゾルスその他に、スクーンメーカー（青山学院）、ラッセル（活水学院）、カートメル（東洋英和女学院）、ギール（福岡女学院）、メリー・ヘッセル（北陸学院）、サラ・スミス（北星学園）等々、女性宣教師あるいは宣教師の妻が創設者となっている学校は、枚挙に遑が無い。

そこで、明治初期の世相の一つとして、ミッション女学校が言及されている。

女学校も耶蘇方面の誘導が多く、私立はたいてい宗教の女学校が多かったものです。築地の居留地に、築地 A 六番女学校というのがありました。明治3年です。明石町の異人屋敷に開校され、続いて同6年には、築地 B 六番女学校というのが開校されたものです。同年に万年橋のところへ、上田女学校が出来、神田佐柄木町に齋藤女学校が創立しました。同7年に駿河台に、ミス・キタ女学校、同8年に猿樂町に、跡見女学校が……開校されて、後には今の閑院宮妃殿下、その以前三条公のお姫さまで入校していました。同年女子小学校というのが麻布に出来ましたが、あれが今日の青山学院なんです。（中略）明治3年から同10年までに、女学校が十軒開設されました。官立はわずかに竹橋女学校が……、開拓使女学校が……、女子師範学校が……開かれました²⁶⁾。

これらの事情から、前述したように、近代日本の女子教育においてミッション・スクールが先駆的役割を果たしたことは広く認められている。

この集団的なキリスト教主義女学校の誕生は、明治にはじまる近代日本の女子教育史を飾る先駆的役割を果たした²⁷⁾。

基督教が我が国の婦人問題に与えた影響の中、最も根本的であるのは、

女子に対する教育を早くから始めたことである²⁸⁾。

〔宣教師が〕キリスト教女学校を殆ど全国的に興したことは、日本における女子教育の開拓者の役割を充分に果たした²⁹⁾。

明治初期の20年間に創設されたアメリカ系を主とする「ミッション・スクール」は日本における女性に対する近代的中高等教育の先駆けであった³⁰⁾。

さらに、ミッション・スクールの女子教育は、先駆開拓者的な存在とその広範な活動とにおいて意義があるだけでなく、「キリスト教の女性観こそその教育事業における発動的精神であり、また実現を期する目標であったこと」に意味があったと評価される³¹⁾。すなわち、「ミッション・スクールの最大の功績は、公教育で取り残されていた女子教育機関のいち早い設立と、女性観の変革および女性解放運動への貢献である³²⁾」という二つの点で高い評価がされている。当時のミッション女学校には「人間としての尊厳を教えられ、独立心にめざめた、新しいタイプの女性像が育ちつつあったのも事実の様である³³⁾。」このことは、後年の婦人解放運動の先駆者たちにミッション出が多かったことから感じられる。つぎの指摘も傍証の一つである。

女に高等の教育を受ける学校のまだいくつもなかったその時代、ミッションは実に新知識の発祥地の感があり、その後精神的に世に現われて何等かの仕事をした女性にはこのミッション出が多く、若松賤子さんもやはりここ〔フェリス女学校〕の第1回の卒業生であったのでした³⁴⁾。

3. ミッション・スクールと女子教育（Ⅱ）

「一般の女子は、多く基督教関係の学校で学んだ。それは、基督教の女学校が、教育方法に於ても設備に於ても優れていたこと、その二は、初めて社会的に解放された女子には、学問の注入以外に、精神的な指導が必要であったから

である³⁵⁾」と、ミッション女学校の教育は、高い社会的評価を受けていた。さらに、つぎのような評価もされている。

ミッション・スクールの教育は、決して流行の先端を追うような浮わつたものではなかった。当時の我が国に於いてこそ、誠に新しい行き方であつたろうが、それはアメリカ精神の根底をなすピューリタン（清教徒）の信仰に立っていた。特にうら若い身を神に献げ、遠く故郷を離れて異教徒の間に伝道しようという純真な人達が指導者なのであるから、ニュー・イングランドの最も伝統的な女学校の高尚な気風が、そのまま移されたものであろう³⁶⁾。

また、女性宣教師と女子生徒とが寄宿舎生活をともにした当時のミッション・スクールは女子修道院に近かったともいわれる。そして、外国人の若い女性宣教師が女子教育に献身する姿が、日本人女性の役割モデルとなったことも充分考えられる。「外国婦人教師と寄宿舎生活を共にする中で、礼儀作法・料理・裁縫などの生活教育や信仰生活の厳しさと豊かさ、そして近代的女性としての生き方が教えられた³⁷⁾。」

それでは、当時のミッション女学校の生徒の評判はどうだったのか。

其の頃女学校の数は乏しかったが、狭い築地の居留地内に今の女子学院の前身の四十二番と青山女学院の前身の十三番と、立教女学院の前身の三十八番と三女学校が鼎足していた。其の頃の女学生は校服も無く、袴も穿かず、髪容はハッキリ覚えていないがマダ束髪も少なく稍や年長者は銀杏返しに結っていたようだ。……教会学校の学生だから油気無しの引詰めに白襟の鼠っぽい微塵や万筋で、尼僧のような服装をしていた。……西洋人の言語動作をお手本にしていたから服装こそクスンでいても西洋人らしい快活さを持っていて、万事の取廻しが活き活きしてドコとなく新しい感じを与えた。其の上に対応がシャンとしていて、ジャラクラした町の娘に

は逆^{として}も見られない気品を備えていた。且又西洋人の生活に親んでいたから万事の趣味が西洋好みで、ミッション・スクールの生徒は耶蘇臭いと云って嫌う向きもあったが、何と云ってもその頃の女としてはミッション出が一番ハイカラでもあったし一番高い教養をも持っていた³⁸⁾。

基督教主義の女学校、即ちガールズ・ミッション・スクールは、明治の若い娘達の憧れの場所であった。外国宣教師に接する喜び、外国のめずらしい事情を聴いたり、外国雑誌に見える流行に目を見張り、英語を習う誇りなど、ミッション・スクールは、智識の泉の湧くところ、流行の生れるところであった。簪がりボンに変わり、下駄が靴になり、海老茶の袴に赤い襯衣の袖先を見せ、片手に英語の書物を抱えて、洋傘をさし、活発に歩いて行く当時のハイカラな女学生はミッション・ガールズであった³⁹⁾。

ハイカラ、快活さ、高い教養、気品、活発、と評判は悪くなかった。なかでも2人とも挙げている「ハイカラ」が注目される。田山花袋の『蒲団』(1907年)にも、つぎのような記述がある。

芳子は町の小学校を卒業するとすぐ神戸に出て神戸の女学院に入り、其処でハイハラな女学校生活を送った。基督教の女学校は他の女学校に比して、文学に対して総て自由だ⁴⁰⁾。

この「ハイカラ」という言葉は、「高襟をつけた洋装の紳士」から「西洋風、舶来品好み」または「当世風、流行の」人また物へと語意が変わった⁴¹⁾。そして、当時、「ミッション女学生」は、西洋的教養や文化に最も近い「ハイカラ女学生」の象徴だった⁴²⁾。

そこで、「ミッション・スクールの学校チャーター(信任状)は、明治日本において最も有効な武器だった『ハイカラ』さであり、それは、外国語能力に代表される『西洋』的教養の表象だった⁴³⁾」と考えられる。

しかし、1870年代から80年代にかけて急増したミッション・スクールも

1899（明治 32）年の文部省訓令第 12 号によって大きな打撃を受けた。その訓令は官公立学校の学科課程に準ずる学校においては一切の宗教教育を禁止するもので、宗教教育をおこなう学校からは官公立学校に準ずる特典を一切取り上げるというものであった。男子にとっては徴兵猶予の特典や上級学校進学資格を奪われることを意味していたので、ミッション・スクールに対しては致命的な打撃を与えるものであった。ミッション・スクールの学生は激減し、閉校に追い込まれるところも出てきた。キリスト教主義の看板を下ろして普通の学校に転換したところ、表面上はミッションの看板を下ろしてキリスト教の教育を続けた学校もあった。女子校の中には、高等女学校の認可を受けずに、女学校という各種学校の地位にとどまったまま宗教教育を続け、さらに教育内容をより高度化するところも出てきた。

だが、同年出された高等女学校令によってミッション女学校はより大きな打撃をうけた。各府県に公立女学校を設立することが規定された結果、公立女学校が急増し、ミッション女学校を圧倒するようになった。ミッション女学校と官公立高等女学校の数（表 2）を見れば、20 世紀に入るとともに女子教育の主流が、ミッション女学校から公立高等女学校に移ったことは明白である。そして、ミッション・スクールでない私立女学校も増えてきた。他の資料によって補えば、1903 年に高等女学校は官公立 83 校、私立が 8 校、ミッション女学校を含む各種学校は私立 67 校であり、1908 年には高等女学校は官公立 122 校、私立 37 校、各種学校は公立 12 校、私立 90 校で、1912（明治 45）年には高等女学校は官公立 234 校、私立が 66 校、各種学校は公立 8 校、私立 64 校、と

表 2 ミッション女学校と官公立女学校の学校数⁽⁴⁾

時 期	ミッション	官立	公立	官公立計
1878(明治 11)	13	0	2	2
1883(明治 16)	19	1	6	7
1893(明治 26)	48	1	7	8
1903(明治 36)	42	1	82	83
1908(明治 41)	43	1	121	122
1913(大正 2)	42	1	259	260

なっている⁴⁵⁾。ミッション女学校が少数派に転落したことは否定しようのない事実であった。

そこで、ミッション女学校が生き残りのためにとった対抗戦略は、教育内容をより一層充実して、学校の評価を高めることであった。

4. ミッション女学校の教育内容

ミッション女学校の教育内容は、一般的に聖書、英語、国語の他に、理科、地理、歴史、音楽といった西洋の先進的学問であり、西洋料理や裁縫、作法、ピアノ、ヴァイオリンなども教えたといわれる。一例として、東京英和女学校（青山女学院の前身）を取り上げて、具体的に教育内容を検討してみよう。

1888（明治21）年に東京府に提出された同校の設置目的を見ると、「海岸女学校の卒業生及び日本淑女に高等普通学科を授け殊に基督教の真理を知らしむる」となっており、科目名はつぎのようになっていた。

本校設置ノ目的ハ英語・和漢学・数学・地理・歴史・天文・博物・生理・物理・化学・倫理・心理・経済・政治・教育・画法・音楽等ノ諸学科ヲ教授スルニアリ。聖書・唱歌・図画・英和書法・裁縫・女紅・割烹・作法等ハ各級ニ之を授ク⁴⁶⁾。

学科課程表は、1年から5年まで秋期・冬期・春期の3学期制で日本語と英語で授業が行われることが示されている。英語の科目では読本・修辞学・文法作文書の教科書が英語であったのは当然としても、歴史・地理・数学・博物・倫理などの教科書も英語であった。専任教員10名中3人は米国人女性であった。このように同校の教科目は整っていて、授業程度も他校より高かった。授業は午前8時に始まり午後4時に終わる。休業日は、土曜日・日曜日および紀元節・神武天皇祭・天長節で、夏期休業は7月上旬より9月上旬まで、冬期休業は12月25日より2週間となっていた⁴⁷⁾。

ミッション女学校は高等女学校ではなく各種学校であったが、高等教育機関

への接続に関しては高等女学校と同等とみなすという文部大臣の指定を受けた学校であった。その中には一般の高等女学校よりも充実した教育を行っていた学校も存在したのであった。例証として、ミッション女学校の代表として、青山女学院と女子学院を取り上げて、高等女学校、男子の中学校と5年間の科目別総授業時間数を比較してみた（表3）。

表3 5年間の科目別総授業時間数⁴⁸⁾

	修 国 外 地 数 理 図 家 裁 法 音 体	1 週
	身 語 語 歴 学 科 画 事 縫 済 楽 操	平均
		時間数
青山女学院（1929－36年）	18 30 33 13 20 12 5 7 6 10	31－32
女子学院（1925年頃）	14 30 37 15 15 10 5 5 13 5 10	31－32
高等女学校	8 28 15 12 13 13 4 6 20 6 15	28
中学校（男子）	5 34 34 15 21 16 5 2 3 15	30

（注）青山女学院・女子学院の修身は聖書講義

それによれば、青山女学院・女子学院ともに週平均授業時間数は高等女学校・中学校よりも多かった。外国語の授業時間数は、高等女学校の2倍以上で中学校に匹敵し、青山女学院の数学も中学校並みであった。その反対に、裁縫の授業時間は高等女学校では20時間あったが、女子学院では13時間、青山女学院ではわずかに7時間であった。家事も高女では6時間、女子学院は5時間あったが、青山女学院では全くなかった。

科目別授業時間数でみると、ミッション女学校の中には高等女学校よりも男子の中学校に近いものがあったといえる。そこでの授業は、上級学校進学のために有利であり、ミッション女学校は進学校としての地位を獲得していった。青山女学院もその例にもれなかった。同校の校史はこう書いている。

専門学校、とくに女子高等師範、津田英学塾、医学専門学校などの入学は年々競争がはげしくなり、それら上級学校への入学率の高い女学校が世間から注目され始めた。そこで英語・数学・国語・理科など受験科目に強

い学校は一層その授業を強化して進学を目標とするようになり、淑やかな家庭婦人育成の目的は後退の道を辿る。

学校当局はこの動きを見通し、他のミッション・スクールに先駆けて、生徒の知的水準の向上に専心努力し、それなりの成果をあげた。兼ねてから知育、とくに英語・数学を重視した高等女学部は進学優秀校として十指のうちに数えられ、とりわけ東京女子大学への合格者が圧倒的に多かった⁴⁹⁾。

実際、1936（昭和11）年の同校高等女学部卒業生の進路を人数で示せば、つぎのとおりであった⁵⁰⁾。青山女学院女子専門部 17、東京女子大学 7、日本女子大学 7、津田英学塾 3、東京女子高等師範学校 3、東京音楽学校 3、医専・葉専・その他 44、就職 18、家庭 75。この結果、同校の進学率は48%となる。しかも、有名女子校のみならず広範な学校へ進学していることがわかる。

また、女子学院でも英語を重視していたので、女子高等師範学校および女子専門学校への進学志願者が急増し、その進学率は90%以上だったという。

そして、昭和初期のミッション女学校においては、卒業生中のキリスト教信者の比率は、地方の女学校では8割以上と高かったが、大都市部の受験有名校では2割ほどの低さであった⁵¹⁾。ここからも大都市のミッション女学校は進学準備校化していったことが、裏づけられる。

5. 日本におけるミッション・スクールの受容

あらためてミッション・スクールが日本に受容された理由について考えてみると、それが、明治以降の日本の近代化＝西洋化過程において、先進的な西洋文明を日本にもたらすのに大きな役割を果たしたから広く受け入れられたというのが、もっとも有力な説明であろう。

ミッション・スクールは、明治初年、英語教育から始まったものが多く、明治・大正にかけて欧米文化の移植に大きな役割を果たし、多くの人

材を生み出した⁵²⁾。

明治期にミッション・スクールが相次いで設立され、ヨーロッパ的な知識普及の拠点としての役割を果たした⁵³⁾。

それゆえ、そこに学んだ日本人の目的も主に実用的なものだった。

欧化主義時代のキリスト教主義学校に多くの子弟が押し寄せてきたのは、英語の学習のためか洋風の生活の習得のためかであった⁵⁴⁾。

多くの生徒の目的は外国人女性教師から英語、音楽、洋裁、西洋マナーなどを学ぶことであった⁵⁵⁾。

数多くの人びとは、教育＝実学そして語学修得という実利実用の便を求めて宣教師達のもとに集まった⁵⁶⁾。

そして、「今の最大の問題は、人々がキリスト教抜き文明を欲しがることだ⁵⁷⁾」と言った宣教師もいた。また、「非ヨーロッパ世界の人びとが宣教師たちを受け入れたのは、教育や医療への強い期待に後押しされたからであり、教育や医療がそこで抵抗なくあるいは積極的に受容されたのは、キリスト教色が脱色された、非宗教的かつ普遍的・近代的なものと理解されていたからである⁵⁸⁾」というより一般的な指摘もある。

ミッション・スクール入学者の中にはキリスト教に興味をもって来た者もいたが、大多数の求めたものは西洋の先進的学問であったといえよう。

それでは、日本の近代化に必要な西洋の先進知識を供給してくれるから、ミッション・スクールは受容されたのであろうか。かりにそうだとしたら、西洋の先進知識の伝達が終わったら、ミッション・スクールの役割は終わり、以後衰退の一途を辿るはずである。そして、確かに欧化主義の時代から国粹主義の時代へ変わるとともにミッション・スクールは一時衰退した。だが、その後盛り返した、いやかつて以上の隆盛をみたのは何故か。ミッション・スクールに実利実用の便以上の価値を見出した人々が少なからずいたことが予想され

る。

前述のように、日本では江戸時代以降長い間キリスト教は邪教として禁止されていた。一般日本人のキリスト教に対する態度は懐疑的なものだった。その一方、明治初期にキリスト教を積極的に受容したのが、士族層だったことは広く知られている。明治新政府樹立に功績があった藩閥出身者を除き、旧左幕派の武士たちは新社会で好ましい地位を得られなかった。さらに、士農工商と武士が上位に置かれていた時代は去り、平民が台頭してくる。士族は西洋の先進知識を吸収して失われた地位を回復する必要を通感した。彼らは洋学を学び、精神的基盤としてのキリスト教を受け入れて信者となった。日本のキリスト教は士族層より農民層に広がっていったといわれる。その信者には中産階級の上層が多いことがよく指摘されている⁵⁹⁾。そこで、まず、キリスト教信者の子女がミッション・スクールの教育を受け入れたと考えられる。

実際、ミッション女学校で学んだ生徒が、どのような階層の出身であったかみると、ミッション女学校設立当時、入学者にはキリスト教信者の子女が多かった。一例として、女子小学校を取り上げれば、スクーンメーカーの始めた当初は私塾に近かった。協力者の津田仙の証言によれば、

「さて生徒を募らんとて彼方此方とすすめたれど女に教育はと笑ひをりて応ずる者なければ余が妻、妻の友、わが娘など取り集め、僅か五人の生徒にて開校しぬ⁶⁰⁾。」

また、海岸女学校・青山英和女学校の生徒としては、進歩的上流家庭の子女、先駆的キリスト教入信家庭の子女、宣教師が各地の伝道先から伴い来ったもの、自らの意志によって自発的に入学したもの、が挙げられている。開明的な華族・士族の子女、キリスト教信者の子女、堅固な意志と強い向学心と勝れた頭脳の持ち主となる⁶¹⁾。

このように、草創期のミッション・スクールには佐幕派士族の娘や豪商の娘、地方名望家の娘など、主として中・上流階級の子女が入学した⁶²⁾と考えられる。

明治十年代から二十年代、特にいわゆる鹿鳴館時代の前後にかけて、日本の上流ないし進歩的な階層が、想像以上にその子女をこの種の学校に率先委託していた⁶³⁾。

1880 年代当時、ミッション女学校に通っていたのは、主として中上階層の家庭の子女であった⁶⁴⁾。

やがて学校の社会的評価が高まるとともにキリスト教信者の子女以外の一般の生徒も増えていく。これに関する詳しいデータは少ないものの、つぎのような資料がある。ミセス・ミラー〔旧ミス・キダー〕は生徒に中の上階層の出身者が多いと見ていた。

私達の生徒の大部分は中流の上の階級に属しています。つまり、昔の侍の娘や商人の娘です。豊かな農家の娘も居ます。普通の貧しい家庭の娘も居ます。貴族の娘はほとんど居ません⁶⁵⁾。

そして、時代が下がった大正中期以降昭和初期を通して、同志社女学校は中流的一般市民層との結びつきを強めたという⁶⁶⁾。また、昭和前期の青山女学院女子専門部入学者の出身校は、つぎのようになっていた。25.1%が青山学院高等女学部から、19.8%が女子学院、東洋英和女学院、フェリス女学院、横浜英和女学院など首都圏のミッション・スクールが多数を占めるミッション・スクールから、12.8%が非ミッション系私立女学校から、34.3%が公立高等女学校から。ミッション・スクール出身者が45%と主流になっており、進学コースとして定着していたように思われる。父親の職業で出身階層をみると、実業家、経営者、官吏、医師などの上流階級が53.3%、商店主、事務職、教員などの中間階級が33.1%、無職が8.1%。上流と中流が合計で86%、無職には地主や資産生活者も含まれていたと考えられるので、9割は中間階級以上であったといえよう⁶⁷⁾。

さらに、1938 年当時の日本の職業構成は、農林水産業が半数であり、官公

吏、会社員、軍人、教員、専門職などの新中間層は、総人口の7.5%を占めるに過ぎなかった。ところが、高等教育機関在学者中の新中間層の比率を父親の職業のデータで見ると、女子高等教育機関では、青山女学院女子専門部65.4%、日本女子大58.3%、津田英学塾57.2%、女高師54.6%、公立女専55.4%、共立女専49.6%、といずれも東京帝国大学の48.0%を上回っており、男子学生よりも高い階層の子女がこれらの女子校に進学していたと考えられる。その中でも青山女学院の比率の高さは目立っている。同校では資産生活者を含む無職も21.5%となっていたので、8割は中間層以上であったと考えられる⁶⁸⁾。なお、無職が2割を超えているのは、男子では、東京帝国大、東京文理大、慶応大、早稲田大、と多いが、女子では青山女学院と女高師だけであり、とくに青山女学院は新中間層以上の階層から女子の進学先として選好されていたといえよう。

キリスト教系女専は「都市中産階級出身者を対象とした欧米型の幅広い教養教育をめざした⁶⁹⁾」ので、後述のように、「首都圏上層階級は、女子ミッション・スクールを、階級文化の再生産を図りながら、子女により高い学歴を獲得させるに適する機関として認めたであろう⁷⁰⁾」と考えられる。

ミッション女学校は、宗教学校としてのミッション・スクールというよりも、ハイカラな西洋的な教養や文化の香りをもったゆとりのある女学校というイメージによって、都市の中・上層の支持を集めていった⁷¹⁾ともいわれる。

では、都市の新中間層がミッション・スクールを子女の進学先として選択したのは何故なのか。次節において女性と教養の意味から考察してみよう。

6. 女性と教養

一般的に、男子と女子とで高等教育機関における専攻分野が異なる傾向がみられる。男子が理学、工学、農学、医学などの理系と経済学、法学など社会科学系への進学が目立つのに対して、女子は英文・国文などの文学や芸術といった人文系、教育・保育といった教育、および家政系を専攻する者が多い。男女の好みの相違はあるかもしれないし、ジェンダーとの関連も考えられるが、高

等教育の学歴のもつ意味が男子と女子では異なるのではないかと考えられる。

歴史的に見ると、明治以来日本では教育が奨励されてきた。高等教育を受ける主たる目的は立身出世のためであったといわれるが、それは高級官僚、専門職、経営管理者、高級軍人などに就くためには高等教育卒の学歴が要求されたということであり、大学卒（学士）の資格はエリートの必要条件であった。就職後の待遇も大卒の幹部候補生から高小卒のブルーカラーまで格差が大きかった。特定の学歴は特定の地位につながっていた。学歴には地位獲得機能があったとされる。だが、このようにいえるのは主として男子の場合であった。戦前の日本では女子の高等学校および大学は設置されず、女子専門学校が女性にとって最終教育機関であった。女子の場合は前述したエリートへの道は閉ざされていた。高等教育の学歴の地位獲得機能は弱かった。高等教育を受けた女子に期待されたのは、エリートの妻になり夫を手助けすることであった。女子にとっては、高等教育を受けたということは、知識学問を修めたということは当然のこととして、それ以上に教育を受ける期間働く必要がなくかつ多額の教育費を支出できるという出身家庭の豊かさを表していた。つまり、その女性が中流階級以上の階層に属していることを示していた。また、高等教育機関を卒業したことは中流階級より上の階級文化を身に付けたことをも示していた。このように女性の学歴は地位表示機能をもっていた⁷²⁾。

男子が将来の職業に直結する理工系、社会科学系の専攻を選び、女子が職業と関連の弱い人文系・芸術系といった教養関係の、そしてより良い家庭生活に直結する家政系の専攻を選ぶのも、学歴の地位獲得機能と地位表示機能との差によるものと考えられる。それはまた、ドイツの歴史・政治・経済・社会学者マックス・ウェーバーが、「教育制度の基礎に関する現在のあらゆる議論の背後には、古い『文化人』タイプ対『専門家』タイプの闘争が、何らか決定的な箇所には伏在している⁷³⁾」と述べたように、教養教育と専門教育という教育の2大機能に対応しているのである。女子の教育の目的は、男子のように将来の職業活動に直結したもの、立身出世のためのものでなく、より広い教養を与えるものであったから、ミッション・スクールの先進的な教養教育は女子の教育に

より適合的であったと考えられる。

さらに、マックス・ウェーバーの社会階層論を取り上げてみよう。彼は、マルクスの主張したような単一の経済的階層（階級）でなく、この他に、政治的階層（党派）、文化的階層（地位）といった差異にも注目した。そして、近代社会においては『『教養』の相違は、所有による区別や経済的機能による区別などの階級を形成する要素に比べれば、真に身分を形成するもっとも重要な相違である⁷⁴⁾』といい、ドイツではいっさいの特権的地位は専門知識の資格と結びついているばかりでなく、ことに一般教養の資格と結びついているともいい、教養市民層というドイツの学歴エリートに言及した。彼は、近代社会において学歴＝教養が身分を形成する要因だと指摘したのであった。

また、フランスの社会学者ピエール・ブルデューは、経済資本の他に、人間関係資本、文化資本、という3つの資本概念を提唱した。文化資本には、身体化された文化資本（ハビトゥスなど）、客体化された文化資本（絵画・書物など）、制度化された文化資本（学歴・資格など）の3種類がある。そして、これらの概念を用いて彼は文化的再生産の理論を提出した。それによれば、階級構造が再生産されるのは、つぎのようなメカニズムによるという。すなわち、経済資本を下層階級より多くもっている上流階級の家庭には書籍や絵画などの文化資本が多くあり、その子弟には美術や音楽の鑑賞経験があり、小さい時からコミュニケーション能力や優雅な振る舞いなどハビトゥスとよばれる文化資本を身に付けていく。文化資本は学校教育と適合的であり、上流階級の子弟の方が下層階級の子弟よりも一般に学校での成績が良い。その結果、上流階級の子弟の方が下層階級の子弟よりも高い学歴を獲得する。一般に高い学歴はより有利な職業的地位という経済資本に直結する。このようにして、豊かな経済資本は豊かな文化資本と関連をもち、それは学歴という制度化された文化資本に変換され、それはさらに経済資本に変換される。だが、学校における成績は個人の能力や努力の結果だと見なされているので、文化的再生産という階級再生産の秘密は隠されてしまうという⁷⁵⁾。

このブルデュー理論が日本にあてはまるかどうか検証した研究によれば、女

子と男子を比べれば、女子の方が正統文化・高級文化を志向する。そして、男子では経済資本と文化資本、文化資本と学歴資本との結びつきは弱い。これに対して、女子では経済資本と文化資本との関連が高く、さらに文化資本は学歴資本に転換され易い。また、学歴資本の高い女性ほど経済力の高い男性との結婚の可能性が高い。つまり、女子では豊かな文化資本は、豊かな経済資本とも結びついている⁷⁶⁾。

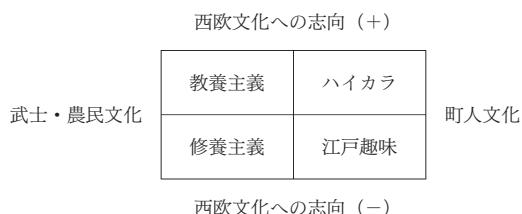
次節では、これらの理論を、近代日本のミッション・スクールにおける女子の教養教育とその関連の問題に応用してみよう。

7. ミッション女学校と新中間層の文化戦略

社会学者の筒井清忠によれば、「文化の享受を通しての人格の完成」を「教養主義」とし、日本の学歴エリート特有の文化とすると、明治後期には教養主義と大衆文化の中核となる修養主義とは同時に同一物として成立したという。学歴エリートの養成機関である旧制高校文化は、努力による人格の完成に高い価値が置かれており、大衆文化の中核的エートスと差異はなかった。教養主義は、大正期に修養主義から分離してエリート文化として成立したという⁷⁷⁾。

教育社会学者の竹内洋は、近代日本のサブカルチャーを、西洋文化への志向の有無（第1軸）と武士・農民文化—町人文化（第2軸）といった2つの軸を組み合わせ、教養主義、修養主義、ハイカラ、江戸趣味という4つの類型に区分している。第2軸（横軸）は質素で真面目な文化と贅沢と遊び心の文化とのいずれに近いかという側面である（図1）⁷⁸⁾。

図1 近代日本のサブカルチャー



それによると、教養主義は修養主義とは鍛錬主義的な点で似ているが、西欧志向である点で異なっている。ハイカラとは西欧志向という点で似ているが、刻苦勉励のエートスの強弱で異なっている。教養主義は町人文化で非西欧志向の江戸趣味とはもっとも遠い。教養主義は、成熟した都市中流階級のハイカラ文化というよりは田舎式ハイカラ文化とでもいうべきものであった⁷⁹⁾。

ところで、東京の大区分として山の手と下町がある。江戸時代、山の手には武家屋敷が多く、下町には町人（商人、職人）が暮らしていた。明治になって山の手には官吏やサラリーマンが住むようになった。東京の地域区分は、新中流階級と旧中流階級・賃労働者という階級区分と符合していた⁸⁰⁾。だが、山の手の新中流階級が下町の旧中流階級に文化的に優位に立ったわけではなかった。下町の商人や職人は山の手勤め人は田舎者と見ていた。山の手族はいくら学問や財産があっても江戸式の伝統文化に欠け、「通」や「粋」の判らない田舎者であった。そこで、「山の手族は江戸式に対抗するため、ヴァイオリン、オルガン、琴、洋装などによる洋風生活をした⁸¹⁾。」その一例として、夏目漱石の小説『三四郎』（1908年）には、三四郎が里見美禰子の家を訪問し、その洋風の住宅の応接間に通される場面に、山の手族の生活が描写されている。

また、東京の下町の砂糖問屋に生まれた国語学者の大野晋は、中学時代、山の手族の級友宅に遊びに行き、シチューやピアノに驚いた。同じ東京なのに言葉づかいも食べ物も違うことにショックを受けたという⁸²⁾。

モダンな山の手文化（ハイカラ）は、山の手族が下町文化に対抗するための文化戦略であった。下町からの「野暮」という批判に対して「下品」を返した。下町と山の手は「粋」と「上品」という文化的アイデンティティを確保した。そして、山の手族の西欧文化崇拜は、上流階級である華族の西欧文化崇拜というバックがあったため、文化戦略たりえたのであった⁸³⁾。

ミッション・スクールの教育・学校文化が、新中流階級に受け入れられたことはすでに指摘したが、その理由として、ミッション・スクールの教育内容はハイカラ文化であり、それが新中流階級の山の手文化と適合的であったと考えられる。

さて、教養主義は西欧文化の取得であり、それは学校を通して取得され、伝統的な身分文化とは切断されていた。上流階級・中流階級のみならず、下層階級の者でも能力さえあれば、取得が可能であった。また、地方出身者も旧制高校において西欧文化を取得できた。

ところが、下層階級や地方出身の者が刻苦勉励して観念的に西欧文化を身に付けること＝教養主義は可能であったが、教養主義とハイカラとは、町人文化との近しさ＝洗練度において大差があった。知識に基づいた観念的な教養が、ある個人の身に付き洗練された行動様式＝ブルデューのいう「ハビトゥス」になることとの間には大きな開きがあった。大正時代以降、成り上りの田舎者とブルジョア文化の中で生れたときから生活している育ちの良い貴族との間には埋めがたい溝が出来た。その結果、「学校的教養である教養主義では成熟したブルジョア文化に対抗できなくなる⁸⁴⁾。」獲得文化資本である教養主義と相続文化資本であるブルジョア文化との格差は、中野孝次の半自伝的小説『苦い夏』に描かれている⁸⁵⁾。ここで、ブルジョア文化というのは、都市（山の手）の新中流階級のハイカラ文化であり、彼らは幼少時から身に付けており、女子の場合、さらにミッション女学校の西洋式の先進的教育で修得した知識を加えて、より一層洗練された文化のことであった。

8. 結びにかえて

これまでの考察から、つぎのような関連があることがわかった。

ミッション・スクールに女子校が多いのは、外国ミッションが日本に派遣した女性宣教師たちが、かつての日本人女性の低かった社会的地位を改善し、より良い社会の担い手を創り出すために、当時日本で軽視されていた女子教育に尽力した結果である。そして、ミッション・スクールの教育は、教養教育が主流であり、女性の教育に適合的であったと考えられる。

また、ミッション・スクールの教育と都市新中間層の文化は、西洋文化への志向＋都市文化＝ハイカラという共通点があった。そこで、日本の都市新中間層が、ミッション・スクールの先進的教育の利用者であった。

さらに、文化資本には豊かな家庭環境の中で獲得する相続文化資本と学校で獲得する獲得文化資本がある。女性の相続文化資本は学歴資本に転化する可能性が高い。そして、女性の学歴資本は経済的に豊かな男性との結婚可能性を高める。よって女性の相続文化資本は配偶者の経済的地位へと変換される。

これらをまとめると、つぎのように言えよう。ミッション・スクールの女子教育は、先進的な西洋的教養や文化を授けたので、ハイカラさが評価され、新興の都市中間層に受け入れられた。それは、教養主義、さらに獲得文化資本＝高等教育の学歴による有利な職業的地位の獲得、立身出世という男子の教育とは異なる機能をもっていた。女子の場合、相続文化資本が、学歴という獲得文化資本に結びついていた。また、女子の高等教育の学歴は中間層の身分文化の持ち主を表示するものであり、それは正統文化の持ち主であることを証明し、その結果、経済資本をもっている男性との結婚機会を高めることになったので、女性の結婚戦略においては、有利であった。ミッション女学校の教育は、お嬢様教育と揶揄されたが、相続文化資本を獲得文化資本によってより一層強化する機能をもっていたので、新中間層の文化戦略に適合していたと考えられる。

注

- ¹⁾ 佐藤八寿子、2006『ミッション・スクールーあこがれの園』中央公論新社、p. 14～p. 15。データは2005年現在。
- ²⁾ 巖本善治、1890「吾党之女子教育」、『平塚益徳著作集Ⅰ 日本教育史』、1985、真珠社、p. 64より再引用。
- ³⁾ 森岡清美、1980『日本の近代社会とキリスト教』評論社、p. 260
- ⁴⁾ 宮沢正典、1976「1930年代の一キリスト教主義女学校」『キリスト教社会問題研究』第25号、p. 108
- ⁵⁾ 『平塚益徳著作集Ⅰ 日本教育史』、p. 177
- ⁶⁾ 『キリスト教大事典』、1963、教文館、p. 314～p. 315
- ⁷⁾ 宮地ひとみ、2004「大阪ステーションの自給と女性宣教師の役割」同志社大学人文科学研究所編『アメリカン・ボード宣教師：神戸・大阪・京都ステーションを中心に、1869-1890年』教文館、p. 192
- ⁸⁾ 篠田敏造、1969『明治百話』角川書店、p. 190

- 9) 『国際教育事典』, 1991, アルク, p. 664
- 10) 外国ミッションの影響下にある狭義の「ミッション・スクール」とミッションから独立のキリスト教学校を区別することもある。例えば, 「同志社はキリスト教主義の学校ではありますが, キリスト教の伝道を目的としたミッションスクールではないのです。」(同志社総長メッセージ, 2002・2・12)
- 11) 並河葉子, 2007「イギリス帝国と女性宣教師」駒込武・橋本伸也編『帝国と学校』昭和堂, p. 267
- 12) 斎藤正彦, 2000「最初のミッションスクール女子学院」築地居留地研究会編『築地居留地 vol. 1』築地居留地研究会, p. 35
- 13) 秋枝蕭子, 1963「キリスト教系女子教育研究のしおり」『文藝と思想』第25号, p. 52。なお, 部分的に表示を変更してある。
- 14) 以下の記述については, 秋枝蕭子, 前掲論文, 小檜山ルイ, 1992『アメリカ婦人宣教師―来日の背景とその影響』東京大学出版会, に大きく依拠している。
- 15) 久山康編, 1993『日本キリスト教教育史―思潮篇―』キリスト教学校教育同盟, p. 110
- 16) 小檜山ルイ, 前掲書, p. 140, 町島豊, 1979「明治前期キリスト教女学校史管見」『教育学雑誌』第13号, p. 39, 齋藤元子, 1999「19世紀後半アメリカにおける女性の領域と女性海外伝道運動」『御茶の水地理』第40号, p. 37
- 17) パノラ・ノヴィック, 1994「女子ミッションのヴィジョン」『キリスト教史学』第48集, p. 78
- 18) 小檜山ルイ, 1994「婦人宣教師の女子教育事業」『キリスト教史学』第48集, p. 77
- 19) 並河葉子, 前掲論文, p. 280
- 20) 小檜山ルイ, 前掲書, p. 191
- 21) 小檜山ルイ, 1988「大阪大会における Miller 女史の報告」『あゆみ』第22号, p. 20
- 22) 秋枝蕭子, 前掲論文, p. 58, 奥田暁子, 1994「ミッション・スクールに女たちの求めたもの」『思想の科学』9月号, p. 60
- 23)24) 秋枝蕭子, 前掲論文, p. 57
- 25) 小檜山ルイ, 前掲書, p. 22, p. 117, 並河葉子, 前掲論文, p. 273
- 26) 篠田鈺造, 前掲書, p. 189～p. 191
- 27) 久山康編, 前掲書, p. 41
- 28) 松宮一也, 1948『日本基督教社会文化史』新紀元社, p. 161
- 29) 町島豊, 1979, 前掲論文, p. 39～40
- 30) 小檜山ルイ, 1994, 「婦人宣教師の女子教育事業」, p. 72
- 31) 榊原悠二, 1949『日本切支丹の歴史的役割』伊藤書店, p. 142

- 32) 『現代教育学事典』, 1988, 労働旬報社, p. 692
- 33) 秋枝蕭子, 前掲論文, p. 64
- 34) 相馬黒光, 1934「黙移」『婦人之友』第 28 巻第 1 号, p. 214
- 35) 松宮一也, 前掲書, p. 162
- 36) 松宮一也, 前掲書, p. 163
- 37) 『新教育学大事典』, 1990, 第一法規出版, p. 323
- 38) 内田魯庵, 1996『魯庵隨筆 読書放浪』平凡社, p. 40～p. 41
- 39) 松宮一也, 前掲書, p. 162～3
- 40) 田山花袋, 1930『蒲団・一兵卒』岩波書店, p. 14～p. 15
- 41) 小川美保, 1989「『ハイカラ』とは何か」『常民文化』12 号, p. 7
- 42) 稲垣恭子, 2007『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社, p. 166
- 43) 佐藤八寿子, 前掲書, p. 59
- 44) 秋枝蕭子, 前掲論文, p. 56
- 45) 稲垣恭子, 前掲書, p. 184
- 46) 青山さゆり会編『青山女学院史』p. 107。なお, 女紅とは裁縫・刺繍・編み物・袋物などの手技全般の呼称であるが, 同校では袋物・細工物のみを指したという。
- 47) 同上書, p. 107～p. 111
- 48) 佐々木啓子, 2002『戦前期女子高等教育の量的拡大過程—政府・生徒・学校のダイナミクス』東京大学出版会, p. 106
- 49) 青山さゆり会, 前掲書, p. 370
- 50) 同上書, p. 434
- 51) 佐々木啓子, 前掲書, p. 108
- 52) 『世界大百科事典』第 21 巻, 1988, 平凡社, p. 397
- 53) 並河葉子, 前掲論文, p. 290
- 54) 『平塚益徳著作集 I 日本教育史』, p. 74
- 55) 宮地ひとみ, 前掲論文, p. 182
- 56) 杉井六郎, 1984『明治期キリスト教の研究』同朋舎, p. 224
- 57) 宮地ひとみ, 前掲論文, p. 177
- 58) 並河葉子, 前掲論文, p. 268
- 59) 『隅谷三喜男著作集 第 8 巻』2003, 岩波書店, p. 186
- 60) 青山さゆり会, 前掲書, p. 56
- 61) 同書, p. 124～p. 125
- 62) 奥田暁子, 前掲論文, p. 63
- 63) 『平塚益徳著作集 I』p. 173

- 64) 稲垣恭子, 前掲書, p. 166
- 65) 小檜山ルイ, 1988「大阪大会における Miller 女史の報告」, p. 19
- 66) 宮沢正典, 前掲論文, p. 116
- 67) 佐々木啓子, 2003「女子ミッション・スクールの階層文化と教育」『日本教育社会学会第 55 回大会発表論文集』 p. 192
- 68) 佐々木啓子, 前掲書, p. 81～p. 85
- 69) 天野正子, 1978「第一次大戦後における女子高等教育の社会的機能」『教育社会学研究』第 33 集, p. 120
- 70) 佐々木啓子, 前掲論文, p. 193
- 71) 稲垣恭子, 前掲書, p. 201
- 72) 天野郁夫, 1983「教育の地位表示機能について」『教育社会学研究』第 38 集, 天野正子, 前掲論文
- 73) マックス・ウェーバー (世良晃志郎訳) 1960『支配の社会学 I』みすず書房, p. 139
- 74) マックス・ウェーバー (山田高生訳) 1982「ドイツにおける選挙法と民主主義」『マックス・ウェーバー政治論集 I』みすず書房, p. 266
- 75) ビエール・ブルデュー (石井洋二郎訳) 1990『ディスタンクシオン I, II』藤原書店
- 76) 片岡栄美, 1996「現代女性にとっての文化資本の意味」『関東学院大学文学部紀要』第 76 号, 同, 2003「『大衆文化』の文化的再生産」宮島喬・石井洋二郎編『文化の権力ー反射するブルデュー』藤原書店
- 77) 筒井清忠, 1992「近代日本の教養主義と修養主義」『思想』No. 812, p. 167, 同, 1995『日本型「教養」の運命ー歴史社会学的考察』岩波書店
- 78) 竹内洋, 2003『教養主義の没落ー変わりゆくエリート学生文化』中央公論新社, p. 179～p. 180
- 79) 同上書, p. 172
- 80) 同上書, p. 181, 杉浦章介, 1993「戦前期東京『山の手』における階層分化と地域分化: 『紳士録』データによる『上からの中流化』過程の分析」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』第 4 号
- 81) 竹内洋, 前掲書, p. 183
- 82) 「天声人語」『朝日新聞』2008 年 7 月 15 日
- 83) 竹内洋, 前掲書, p. 186
- 84) 同上書, p. 192
- 85) 同上書, p. 188～p. 190, 高田里恵子, 2005『グロテスクな教養』筑摩書房, p. 198～p. 200